

## 寝流れの鮫の行方や青満月

澤 好摩

（句集『返照』）

七月七日に七十九歳で世を去られた澤好摩氏の最後の句集『返照』より。高柳重信に師事し「俳句研究」の編集に携わりながら、夏石番矢、林桂らと同人誌「未定」を創刊、後に一九九一年「円錐」を創刊、編集発行人を務めた。二〇一四年には、句集『光源』により芸術選奨文部科学大臣賞を受賞されている。

私自身は、この十年ほど小林恭二を中心とした「木曜会」で澤さんと句座を共にさせていたのだが、我々後進の作家たちに分け隔てない率直な批評をしてくださった。特に俳句形式を生かすための措辞には蒙を開かれることが多かった。俳句形式への期待が熱く伝わってくるのであった。実は、澤さんには学生の頃「未定」に発表された感銘句について短い私信をお送りしたときに、葉書での返信をいただいた。それから三十五年以上経て、「木曜会」のおかげで、句会での警咳に接する機会を得たのであった。

今回の句集にも句形の美しい句が多いが、私は次の句が特に好きである。〈夜も更けて秋七草を文字鎖〉〈池は一噸爆弾の穴鬼やんま〉〈山下りてなほ山中や花空木〉〈氷瀑の夕べ伽藍となりにけり〉〈火蛾は火に遠く浮きたる忘れ潮〉〈行き来する祭囃子を水景色〉〈老木の木霊醒ますか春の雨〉〈山国の闇夜をかけてちる桜〉〈海鼠嚙む男肉置きゆたかなり〉〈掘る砂に水湧く春を疲れたり〉〈おとうとよ雪野の奥に雪の山〉。いずれも発想が最短距離の言葉で定着している。

上掲の句は巻末近くに収められているが、「寝流れ」とは、「水面を寝たまま流れて行くこと」（『日本国語大辞典第二版』）。用例には「わが恋は海驢（さめ）のねながれさめやらぬ夢なりながらたえやはてなん 藤原家良」が引かれている。近世には「海驢（ミチ）の寝流」の俚言も流通したようだ。ただ、この「海驢」はアシカの古名らしい。

澤さんの「寝流れの鮫」はこの古歌を自分の晩年に引き寄せて編み直したものか。酔生夢死にも似た「寝流れ」の先には「青満月」。作者の最期を冴え冴えと彩る。海驢を鮫とされたが、鮫の精悍な美こそ作者の俳句形式に対する美意識であり、作家としての矜持であったかとも思う。

## 花を待つわれをよろこび花を待つ 黒田杏子

（二〇二〇年作・句集『八月』所収・角川文化振興財団刊）

三月に逝去された黒田杏子の最終句集『八月』より。生前に刊行計画を伝えられていた高田正子さんを中心に編まれた句集である。十一年ほどの三百九十一句を所収。

最初にお会いしたのは、私が学生の時、作者四十歳頃。山口青邨の「夏草」の月例会に参加されていた。「ももこ」という名乗りの柔らかな声と、「杏子さんはお母さん思いだね」という青邨先生の声が耳底に残っている。

ある時、へ暗室の男のために秋刀魚焼く〜という句が特選に入った。その写真家のご主人・勝男氏にお目にかかったのは、なんと四十数年後、今年の「黒羽芭蕉の里全国俳句大会」の席であった。勝男さんは杏子さんの車椅子を押しておられたが、二人とも和やかであった。句集にも返歌のようなへ梅雨上る男の作る朝ごはん〜があつて微笑ましい。

作者の大きな主題はいくつかあるが、一つは「桜巡り」。本句集にもへ花巡るいつぼんの杖ある限り〜へ初花の天に凍

れる高野かな〜などの佳品がある。冒頭の句は、そんな花を待つ自分をまず作者自身が喜び、そんな作者をご主人も喜んでいような気配がある。やわらかい心の交わりがやさしい文体で詠まれている。

一方で、戦時中の疎開先の体験を通した「螢」も大きな主題であった。昨年「俳句」に発表された螢の句は、記憶を現在形で編み直すように書かれていて印象深かった。家の中まで乱舞する螢との共生体験は、螢の命が作者の命と対等のものであつた。本集のへほたる死す徹宵のペン置きたれば〜は、瀬戸内寂聴さんの厳しい文筆作業を詠んだものだが、基本的には作者の螢体験の延長上にあるうか。

金子兜太との親交も忘れられない。本句集にも、へ兜太待つ秩父往還まむし谷〜へ春北斗寝釈迦の相の大詩人〜など自由な捉え方で兜太像を提示してくださつた。

学生の時に、「夏草」の句会の後であつたかと思うが、東大正門前の喫茶店「ルオー」で有馬朗人先生と黒田杏子さんと一緒にお茶をいただいたことがあつた。その時の二人の澆瀨とした印象から四十五年、青邨先生亡き後は、お二人とも俳誌を創刊し、俳句に大変な情熱を注がれた。もちろん、晩年は身体的不如意もあつたが、へ斃れたる後の月夜の一遍忌〜など心はさらに自由な翼を獲得された。

## こころ弱き日は氷紋に眉照らし 石原八束

（昭和四十四年作・句集『高野谿』所収・東京美術刊）

以前、「らくだ日記」にて次のように書かせていただいた。へどうしても弱気になってやまない日は、誰にも訪れよう。理由は分からないのに、なにかしら厭世感にとらわれて、これから先の生き方に自信がもてなくて、あるいは俳句の新境地をなかなか拓けなくて、ただただ「こころ弱き」ままに無為に一日をすごしてしまう。三好達治の『一点鐘』にも「志おとろへし日は」という詩があるが、八束の「こころ」はこの「志」に近いものかもしれない。

ともあれ、そんなとき八束は近くの池にでも出かけたのであろう。厚氷に氷紋ができているのをじっと見つめているうちに、みずからの眉あたりに氷の光が撥ね返って映っているのを感じた。繊細な感情の句だと思う。〈

ここで三つのことを補足しておきたいと思う。

一つ目は「氷紋」である。国語辞典には未収録の語である

が、グーグルで引くと日本雪氷学会誌に発表された東海林明雄氏の論文「結氷した湖面などに形成される氷紋」（二〇一四年）に出合い、池だけではなく湖などまで生成過程を含めて多彩なものがあることを知った。たいへん幻想的な自然現象のようである。

二つ目は、『氷紋』とは、一九七二年に渡辺淳一が発表した小説だが、八束の句は一九六九年だから、さらに時期を遡る。学術用語、あるいは寒冷地の日常生活語であったとすれば、いつ頃から使われ始めたのだろうか。

ちなみに、三好達治の詩は、二連からなるが一連目を引けば、次のようなものである。（／マークは改行）

〈こころざしおとろへし日は／いかにせましな／手にふるき筆をとりもち／あたらしき紙をくりのべ／とほき日のうたのひとふし／情感のうせしなきがら／し

たためつかつは誦しつ／かかる日の日のくるるまで〉

こちら「情感のうせしなきがら」とは鬼気迫る。

やや自己演出的な雰囲気がないでもない句だが、繊細な感覚の句としてやはり心に残るには違いない。

鉾津鑄びの荒梅雨溪の鳴りけむる 石原八束

（昭和四十年作・句集『操手』所収・牧羊社刊）

「同人高杉平知楼急逝」の前書がある一句。もちろん私自身は面識がないが、創刊の頃の「秋」に参加されておられたのであろう。「高杉平知楼」でグーグル検索すると、「足尾の風景」(<https://shorebook.jp/ashi/kinsan33sei1.htm>)（二〇〇九年開設。制作・管理：岸本とおる氏）というサイト。「足尾精錬所のある風景」の章に「坑出でし坑夫に西日殺到す」「薫風や町を見下ろす五日荘」「雪嶺を四囲に足尾の春遅し」「鉾山の社宅の空や五月鯉」などが紹介されてをり、「明治三十九年生、足尾出身」とある。足尾銅山に縁の深い方だったのであろうか。ちなみにこの章には『足尾銅山俳壇史』（太田貞祐著・ユーコン企画・一九九七年）を参照した」と但書きが添えられている。また、ここには、やはり「秋」の主要同人でもあられた太田後凋氏（龍蔵寺第五十六世住職太田貞観大僧正）の「若葉谷は鉄索たるみ

懸りけり」「つばめ来る鉾山より古き寺一字」も紹介されている。

上掲の句に戻るが、これは足尾銅山精錬所があった山溪を想起しながらの追悼句であろう。鉾津はスラグとも言われるが、外に捨て置かれてあれば金属を含んでいるので鑄びもしよう。その溪に荒々しい梅雨が音を立てて打ち付けわたる。雨脚の強さは、鑄が目立つような鉾津だまりを叩き、傍の川面を叩きけむり立つという激しさを持つ。そのような荒々しい風景と時代の中に生きてきた地元出身の俳人に対して、その思いの奥処を驚掴みにしたような追悼句である。私自身もそうであるが、作者を知らない読者は、この句から生半可な鎮魂の句にはないほど、時代の産業政策の強い陰りと土地に根差した宿命的な激しい心情を抱いた一生を感じ取るのではなからうか。高杉平知楼についてはまだ調べなければ確としたことは書けないものの、勇み足を承知で石原八束の生半可ではない鎮魂の在り方を覗いた気がした。『足尾銅山俳壇史』はいま取り寄せているところだが、何らかの情報をお持ちの方があればご教示いただけるとありがたい。

## 炎天の振子に縋る悪の翳

石原八束

（昭和三十八年作・『空の渚』所収・三雲書店刊）

この句集の巻尾に八束は「炎天」の句を四句ほど載せている。〈炎天の石ころがれりこんにちは〉〈炎天の黒人霊歌けむらへり〉、そして本句と〈炎天の鎖をひいて疾走す〉。

季語の「炎天」から人間の営みの何が引き出せるか思索試作しているかのようだ。上掲句について、「翳」は必ずしも成功しているとは言えないだろう。しかしながら、炎天の巨大な振子という虚のイメージに縋らざるを得ない悪の陰翳が見え始めていることには驚く。天の振子の刻む時代の流れに遅れまいと縋るように身を任せている間に、いつしか多様な欲にとらわれて悪の翳が生まれてしまうような人間の宿命を物語ろうとしているかのようでもある。

本句集には、旺盛な吟行句に加えて、〈くらがりに歳月を負ふ冬帽子〉を始めとする「内観造型」の句、やや観念的ながらも内観的なイメージ句がときどき見られるが、一方

で、やるかたない人間本態の「悪」への憤懣を押し殺すように嘲笑している句も散見される。〈眼鏡暑にくもる慇懃にあざむかれ〉〈水洩やすこし機嫌の名土面ら〉〈凍てに曳く悪玉の影闇に消ゆ〉〈悪玉が笑へり赫き盆の月〉など。

この最後の、「悪玉」の句は昔から気になっていたが、アクが強くて私にはあまり受け入れられない句の一つであった。俗臭的な作意が感じられてしまうのだった。この句の「盆の月」には本来の先祖を偲ぶ心情が希薄なようにも受け取られた。もちろん、実際に世の中を跋扈していた悪党の先祖がいたことも確かであるし、この陰の部分が人間の本態に深く迫り、文芸の厚みや立体性をもたらしてきたことも事実である。だが、俳句という極端に短い詩においてこの陰の部分を季語と併せて取り込むのはかなり高難度の技ではないかとも思う。

一方、人間の悲劇性に加えて、このような人間の不良性についても八束が俳句の世界の中に意識していたことも、あながち的外れではなからう。このダークサイドの笑いが自嘲的あるいはやや自虐的に自分自身の内面へ降りていくと、

「くらがり」のような句に辿り着くのもかもしれない。ともあれ、上掲の句のイメージが示唆するところは現代俳句においても決して小さくはないかと思う。

unfolding a dry leaf...

I find a few dewdrops

hidden inside

—Ion Codrescu

ひろげたる枯葉に隠れぬし滴　イオン・コッドレスク

イオンさんはルーマニアの俳画家・俳人、連句もお作りになる。一九五一年生まれで、コンスタンツァ・オヴィディウス大学元准教授、ルーマニア・コンスタンツァ俳句協会の創始者で、かつ編集者でもある。高校の時に俳画と出会い、その後いくつかの奨学金を得ながら来日。日本の伝統的な俳画を吸収し、西欧風の精神風景を底に敷いた独自の現代的画風を展開して今日に至っている。私にとっても二十余年ぶりの再会であった。イオンさんは、欧米各国を歩いては俳画や水墨画を軸とする美術と、俳句・連句などを広めてこられた。すでに著書は二十冊を数える。四月十七日私どもの「秋」でも「Painting in Poetry」という講演をしていただくことができた。これは十八か国の俳人の百句を収録した「HAIGA」(Edition A.F.H., 2012)というフランスの出版社から刊行した本から、二十数点の俳句と俳画

の紹介されたものであった。俳句と俳画の素材的な距離感の取り方には、ときにユーモアも交じり、現代俳句にも示唆されることが大きかった。

上掲の句（≪佐怒賀訳）は、その講演とは別のテキストで出合った私の一番好きだった句である。「作者を教えて」とメールしたら、「それは私の俳句です」とすぐに返事が来て大変うれしかった。すでに枯れて丸まっている葉っぱを拾って開こうとしていたところが、何よりも俳人らしい。俳諧は三尺の童にさせよ、の好奇心に満ちた童心。枯葉を開いてみると、その内側の底の方に、二、三滴分くらいの露しづくが隠れていた、というのだ。まずは何よりも枯葉の中の露しづくとの出合いを子どものように素直に喜び楽しみたい。その上で、詩心の象徴的奥行きを味わうことになる。外側は枯れという老いを余儀なくされながらも、心の内側には生命の力をしづかに保ち養っている。芭蕉はじめ「わび・さび」の精神風景もかくの如きであったかななどと、ふと時間軸を遡って詩心の在り方をたのしんだ。もう一つの講演「芭蕉とブリュッセル」でも示唆されることは深く多かったが、それはまた本誌の紙面を借りて後日ゆっくりとご紹介したい。取り急ぎ、二週間の東京滞在中で五回の講演を好評の内に無事終えられたイオンさんに敬意と感謝の意を表したい。

## 山焼きの焰をさかおとす迅風かな 石原八束

（昭和三十五年作・『空の渚』所収・三雲書店刊）

前回この句を次のように評した。

「阿蘇の山焼きを詠んだ句。この年、八束は三好達治のかつて歩いた阿蘇を訪ねて『俳句』に八十一句を発表、句集にも七十七句を収めている。もともと、この句などは前書がないから、どこの山焼きを想像してもかまわない。固有名詞に頼らずに句の情景が鮮明に伝わってくれば、その句は普遍性を得たことになる。八束が固有名詞を外した理由もその辺にあるうか。

春先の山焼きは、まだ風の強いことが多いのだろう。へ霜の華きらきらくづれ阿蘇もゆる 八束とあるくらいだから、まだ寒さもきびしいころだ。この句は、『山焼きの』で少し息をつけて、『焰を』『さかおとす』『迅風かな』と一気に読む。その流れに勢いがある、山焼きの焰が、中空へ育ったかと思うと一気に斜面を舞い落ちてくるような、迫力あるダイナミックな句になった。」

この内容については変更することもあるまい。今回は、この句を構造的に読み解いてみたい。この句は、句末の「かな」に一気に流れ込んでいくので、「さかおとす」の直後には切れはなからう。すなわち、意味的にも「山焼きの焰をさかおとす／迅風かな」ではなく「へ山焼きの焰をさかおとす」迅風かな」なのである。もちろん、この句の主格は「迅風」である。散文的に書けば、「迅風が山焼きの炎をさかおとす」となるはずだ。この散文的な書き方に沿って読んでもれば、「迅風」の擬人化も含めて大きな破綻もなく風景が収まる。

一方、これが上掲の俳句仕立てになるや、「山焼きの焰をさかおとす」と主格はまだ隠されてはいるものの、大いなるものの力によって山焼きの焰が急斜面を勢いよく滑り落ちるさまがまず目に飛び込んでくる。そのあとで、滑り落ちる一面の焰の奥から、煽り立てるように「迅風」が追い打ちをかけてくる。このときの「迅風」は自然現象でありながら、何やら人智を超えた鬼神のような力に満ちている。この読みは多少強引で場合によったら勇み足かもしれないが、この句を読み直した時に、句末の「かな」の切れ字の効果と共に、俳句の倒置法によるダイナミックな蘇生感を感じ取ったことを、ここに記しておきたい。

## 妻と浅蜷は厨に泣きぬ明やすし 石原八束

（昭和三十四年作・句集『空の渚』所収・三雲書店刊）

前回に引き続き第三句集『空の渚』から。実は、以前「らくだ日記」の時に、この句について次のように評した。

△八束の代表句で、愛唱している人も多いかもしれない。私は、「妻と浅蜷」の組み合わせには惹かれるが、「厨」は少々常套的かと思うし、「明やすし」は舞台を作りすぎてしまっていると思う。しかしながら、この句を読むたびに、そのように感じるのは、私自身が平和で豊かな時代に馴れて生活しているからではないかとも反問してみる。いったい、八束は何を感じてこの句を詠んだのだろうか。

この句の面白さを一つだけ言えば、それは、妻と浅蜷の悲しみの出口が異なることだ。妻の方は、泣き止めて再び一日の生活へとけなげに立ち向かう。浅蜷の方は、泣いた後に待っているのは食べられてしまう運命。徹夜をした翌朝、早々と厨に立っている妻を見て、その両方の悲哀の内容に思いを馳せたのだろうか。変といえ、たしかにへん

な句だが、戦後のつましい生活感が伝わってきて、私は好きな句。現代のシステムキッチンにはない楚々とした味わいが感じられる。▽

いま読み直すと、いちばん大事な点を書き落していたかと思う。それは時代的な女性の立場の弱さである。一般的には、「厨」という語からは、現代の「キッチン」にはない、「楚々とした味わい」というよりも、薄暗い（もつと昔ならば土間に通じる）炊事の空間を感じ取るべきなのだろう。「厨」は家の中で女性の仕切れる空間でもあったが、それは古い社会体制の中で女性が暗黙の内に「任されてしまった」場所でもある。昔の古い木造平屋ならば、冬にはガラス窓が風に鳴り、隙間風なども入ってきた時代だ。日々の厳しい妻の役割と状況に耐えながら夫に見えぬように一人忍んで泣くのも、この「厨」であったのだろう。その場面を八束は見てしまった。それをペーソスを誘うかのような句に成しているが、現代ではこんな醒めた書き方はできないかもしれない。

それはそうとして、いまの恵まれた若いシステムキッチン世代に、この「厨」の語が醸し出す翳りや闇の奥行きがどのくらい見えたり感じたりできるだろうか。「蚊帳」と同じように「厨」も死語になりつつある。これらも、私自身にとって郷愁めいて浮き上がってくるようになってきた。



花ふぶく荒波島の納戸神 なんどがみ  
石原八束

（昭和三十四年作・句集『空の渚』所収・三雲書店刊）

第三句集『空の渚』に移ろう。これは第三句集ながら、三好達治先生のご多忙な事情の中で第二句集と発行順序が逆になってしまった珍しい句集である。もともと、私自身の第一句集と第二句集も石原八束先生の同様なご事情で、発行順序が逆になった経緯がある。そのとき先生は「順序が逆になることはたまにありますよ」と確信をもってお答えになったので、妙に納得してしまった記憶がある。今年元旦の机に向かってこんな感懐にしばし耽っている。

ところで、この句集『空の渚』の序詩は三好達治作。何度読んでも私は何よりも日本語の美しい姿と調べに惹き込まれて、しめやかでひろびろとした心象風景に飽きることはない。すこし長いが新年なのでお許しをいただこう。

空のなぎさ

三好 達治

いづこよ遠く来りし旅人は

冬枯れし梢のもとにいこひたり

空のなぎさにさしかはす

梢のすゑはしなめきて

煙らひしなひさやさやにささやくこゑす

仰ぎ見つかつはきく遠き音づれ

落葉つみ落葉はつみて

あたたかき日ざしのうへに

はやここに角ぐむものはむきむきに

おのがじし彼らが堅き包みものときほどくなる

路のくま樹下石上に昼の風歩みとどまり

旅人なればおのづから組みし小指にまつはりぬ

かくありて今日のゆくてをささんとす小指のすゑに

さて、冒頭の句に話を戻そう。昭和三十四年、八束は唐

津、有田、中津、柳川、平戸、諫早など九州を吟行してい

る。その中の一句で、平戸島での作と思われる。この「納

戸神」は、「隠れ切支丹の納戸に祀られた聖画像など」。厳

しい自然ながら花ふぶく力強さの裡に祀られている納戸神

は、隠れ切支丹の心象風景に相応しいかとも思う。四百年

も昔の風景がいまでも眼前にありありと見えてくる。